

南 那 珂 地 域

土地分類基本調査

都 井 岬

5 万 分 の 1

国 土 調 査

宮 崎 県

1 9 9 2

序 文

国土は、国民のために限られた資源であり、その有効利用をはかることが必要となっています。本県においても恵まれた自然環境を保全しつつ、地域の特性に応じた土地利用を行うべく各種の施策を進めているところです。

本調査は、このような諸施策を進めるのに必要な調査のうち「地形」「表層地質」「土壌」等についての土地条件を体系的かつ総合的に調査することを目的として、国土調査法に基づく都道府県土地分類基本調査を実施するものです。

本県では、昭和45年に経済企画庁により調査された「宮崎」図葉を除き、昭和55年度「都城」図葉を始めに、県内全域にわたり調査する計画であります。

平成3年度に調査しました「都井岬」図葉は、串間市、南郷町の1市1町を含む地域です。

この調査の成果が広く関係各位に御活用いただきますよう希望するものです。

最後に、本調査を実施するにあたり御指導御助言を賜った国土庁国土調査課をはじめ、関係各位の御指導御協力に対し、感謝申し上げます。

平成5年3月

宮崎県農政水産部長 高 妻 達 郎

ま え が き

本調査は、国土調査法（昭和26年6月1日法律第180号）第5条第4項の規定により国土調査の指定を受け、土地分類調査関係の各作業規定準則（総理府令）に基づいて作成した『宮崎県土地分類基本調査作業規定』により実施したものです。

本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿です。

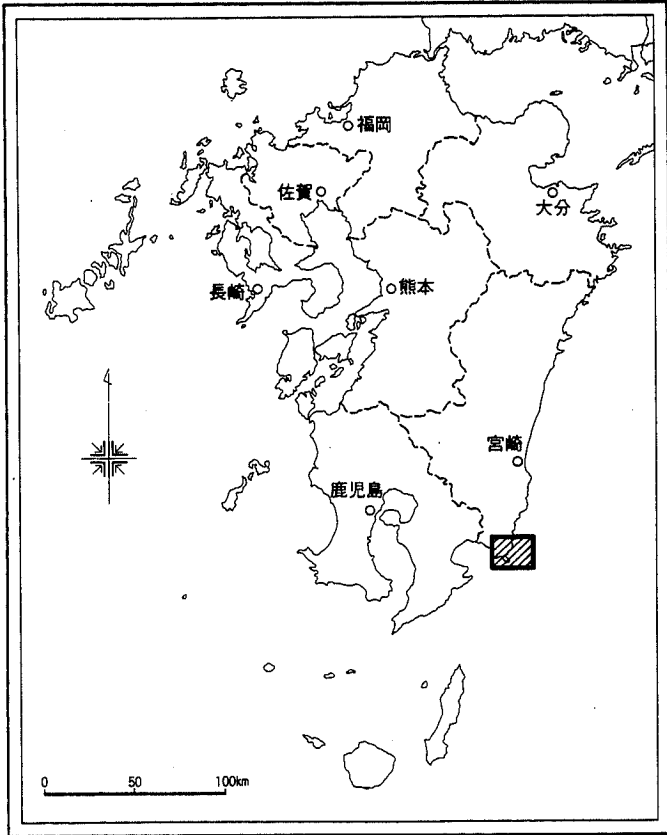
調査基図は測量法第27条第2項の規定により、建設大臣の刊行した5万分の1地形図を使用したものです。

調査の実施、成果の作成関係者は下記のとおりです。

指 導	国土庁国土調査課	庄 司 浩
総 括	宮崎県農政水産部農業振興課	栗 林 洋 嗣
	〃	倉 田 富 夫
	〃	杉 尾 昌 嗣
地形分類	宮崎土地分類基本調査研究会	遠 藤 尚
及び表層	〃	金 子 弘 二
地質調査	〃	白 池 凶
（水系谷	〃	流 田 勝 夫
密度、傾	〃	山 北 聰
斜区分、	〃	隈 本 幸 一
起伏量、	〃	米 丸 克 彦
標高区分	〃	田 代 忠 光
を含む）	〃	曾 山 睦 生
	〃	兵 藤 健 三
	〃	足 立 富 男
	〃	小 林 実 夫
	〃	富 田 高 明

地形分類	宮崎土地分類基本調査研究会	岩元勝也
及び表層	〃	池尻典三
地質調査	〃	穴戸章
(水系谷	〃	上中園幸夫
密度、傾	〃	永野寛
斜区分、	〃	森直義
起伏量、	〃	海江田脩幸
標高区分	〃	野崎俊一
を含む)	〃	壇上隆
	〃	小松秀彦
	〃	赤木武夫
	〃	中村圭介
	〃	大野大朗
	〃	赤嶺宏樹
	〃	青木歩
	〃	黒木重成
	〃	原武志
	〃	橋元茂
	〃	大津山真
土壤調査	宮崎県総合農業試験場	牧慧
	〃	岩下徹
	宮崎県林業試験場	黒木満義
土地利用	宮崎県農政水産部農業振興課	杉尾昌嗣
現況調査		

位置図



目 次

序 文

まえがき

総 論

I	位置及び行政区画	1
II	地域の特性	2
III	人口等	3
IV	主要産業の概要	4

各 論

I	地 形	7
II	地 質	19
III	土 壌	24
IV	土地利用現況	31

〔地 図〕

地形分類図、表層地質図、土壌図、土地利用現況図

総論

I 位置及び行政区画

1. 位置

「都井岬」図葉は、県の南部に位置している。図葉の経緯度では、東経 $131^{\circ} 15'$ ~ $131^{\circ} 30'$ 、北緯 $31^{\circ} 30'$ ~ $31^{\circ} 20'$ の範囲内にあり、全面積（陸地面積） 298km^2 である。

2. 行政区画

本図葉の行政区画は、串間市、南郷町の1市1町である。

図 I - 1 行政区画

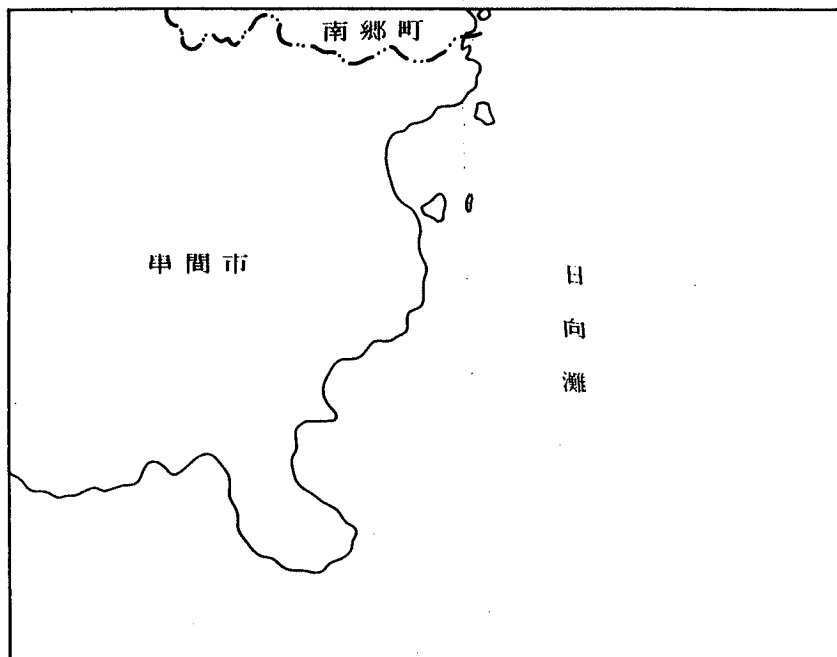


表 I - 1 図葉内の市町村別面積

市町村名	図葉内の面積		市町村全体面積 B (km ²)	A / B (%)
	実数 A (km ²)	構成 (%)		
串 間 市	143.06	94.2	294.80	48.5
南 郷 町	8.86	5.8	63.15	14.0

資料：建設省国土地理院調べ。ただし、図葉面積については宮崎県農業振興課調べ

II 地域の特性

本図葉は県の最南部で海に面した地域である。

本地域は総合保養地域整備法（リゾート法）指定の市町村の串間市が図幅の大半を占めている地域である。

天然記念物のソテツの自生地がある都井岬は、野生馬の繁殖地である。幸島には餌付けに成功した野生猿がいます。

交通の便は、図幅内に鉄道はなく、東側の海岸沿いに県道が走っている。

Ⅲ 人 口 等

図業内に含まれる市町村の人口は39,976人である。平成2年と昭和60年の人口を比較してみると両市町とも減少し、全体では5%の減少がみられる。

世帯数については、串間市は5%の減少がみられ、南郷町は1～2%の増加がみられる。

就業構造をみると、第3次産業従事者が多く、次に第1次産業従事者がつづいている。

表Ⅲ－1 人口動態

項目 市町村名	昭和60年国勢調査		平成2年国勢調査		世帯増 減率(%)	人口増 減率(%)
	世帯数 (世帯)	人口 (人)	世帯数 (世帯)	人口 (人)		
串間市	9,242	28,328	8,741	26,734	94.6	94.4
南郷町	3,758	13,707	3,864	13,242	102.8	96.6
計	13,000	42,035	12,605	39,976	97.0	95.1

表Ⅲ－2 就業構造

項目 市町村名	第1次産業		第2次産業		第3次産業		計	
	比率 (%)	就業者数 (人)	比率 (%)	就業者数 (人)	比率 (%)	就業者数 (人)	比率 (%)	就業者数 (人)
串間市	31.6	3,934	23.7	2,946	44.7	5,571	100	12,454
南郷町	42.3	2,755	17.5	1,142	40.2	2,621	100	6,241
計	32.9	6,142	22.5	4,204	44.6	8,346	100	18,695

平成2年国勢調査報告より

IV 主要産業の概要

図業内は日南海岸国定公園の東部から南部の都井岬の沖は漁場となり、都井岬の観光ホテルなどがあるが、大きな産業はなく柑橘類の果樹の栽培がみられる。

1. 農業

本地域の粗生産額の耕種部門約69%のうち、いも類の割合が25%、野菜、米、果実が12%を占めているが、特に串間市はいも類の割合が高い。

畜産部門31%の中で肉用牛が14%を占めている。

表IV-1 農業粗生産額及び生産農業所得

(単位：1000万円)

区分	農業粗生産額	耕種									
		小計	米	麦類	雑穀類	いも類	野菜	果実	花き	工芸作物	その他
串間市	1,363	947	166	0	3	433	161	83	11	82	8
南郷町	361	234	40	-	0	4	57	118	2	1	11
計	1,724	1,181	206	0	3	437	218	201	13	83	19
	100.0	68.5	11.9			25.3	2.6	11.7			

区分	養蚕	畜産						加工農産物	生産農業所得
		小計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他畜産物		
串間市	2	409	206	52	89	62	2	5	574
南郷町	0	126	37	-	62	27	0	0	144
計	2	535	243	52	151	89	2	5	718
		(31.0)							

2. 工業

本地域の事業所数は、平成3年に118事業所で県下事業所数の4.6%、製造品出荷額では162億円で1.2%となっている。

表Ⅳ-2 工業の概要

区 分	事業所数	従 業 者 数			年間製造品出荷額等(万円)
		総 数	常用労働者	個人事業主・家族従業者	
串間市	89	1,505	1,432	73	1,020,535
南郷町	29	670	657	13	602,181
計	118	2,175	2,089	86	1,622,716
宮崎県	2,590	79,535	78,434	1,101	136,250,731

宮崎県の工業（平成3年工業統計調査結果）

3. 商業

本地域の商業の中心は串間市で、商店数は県全体の3.4%で、年間販売額417億円は県全体の1.3%である。

表Ⅳ-3 商業の概要

区 分	商 店 数			従 業 員 数 (人)	年間生産額 (万 円)
	総 数	卸 売 業	小 売 業		
串間市	498	45	455	1,649	2,440,815
南郷町	241	31	210	869	1,729,901
計	739	76	665	2,519	4,170,716
宮崎県	21,664	4,120	17,544	102,125	319,622,826

宮崎の商業（平成3年商業統計調査結果）

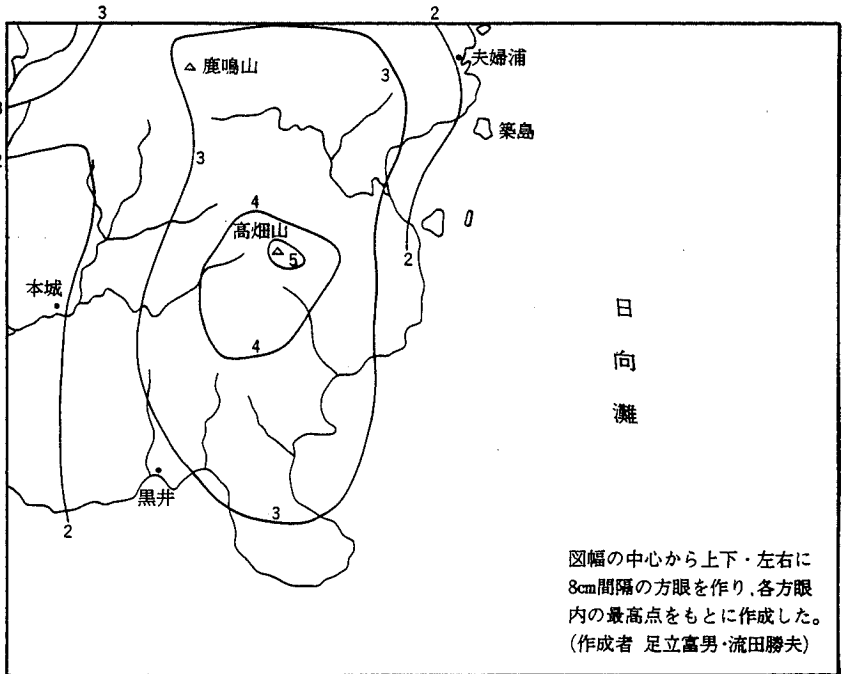
各 論

I 地 形

本図幅地域は宮崎県の最南端に位置し、南那珂山地の南端部にあたる山がちの地域であるが、日向灘と志布志湾に挟まれて南々東へ少し突き出し、半島状の輪郭を示している。

地域の最高点は高畑山にあり（自衛隊分屯基地内東側の電波塔の東で海拔534m）、切峰面は東西には急、南北には緩やかに傾いて、楕円形状の盛り上がりを示している。高畑山付近には、高度や起伏がいくらか大きい山地が見られるが、その他の大部分の山地では、高度も起伏もそれほど大きくはない（切峰面図を参照のこと）。

切 峰 面 図



地域内の主な河川として、北東部には日向灘に注ぐ市木川とその支流があり、西部には志布志湾に注ぐ本城川とその支流（中園川・黒仁田川など）があり、北西縁は福島川の支流（大平川、秋山川、その他）で限られている。

これらの主な河川に沿っては沖積低地が見られ、またシラス台地や段丘が分布している。そのほかに山地を刻む多くの小河川があって、日向灘あるいは志布志湾に注ぎ、小平地を伴っている。

海岸線は大まかに屈曲し^{*1}、その南端が都井岬として突き出している。北東部では鋸歯状の細かい出入りが見られ、黒島・築島・幸島・鳥島などの島々のほか、銅島の陸繋島がある。さらに図幅北縁で岸から3.7kmの沖合にある水島^{*2}のほか、七ツ岩・立岩・黄金瀬・トセンバイその他の岩礁が海岸に沿って各所に見られる。

市木川の河口は、築島・幸島・鳥島で護られた大きな湾入部にあり、藤から石波にかけて砂丘が作られている。また、山地を刻み海に注ぐ小河川の河口部が小さな入江となり（夫婦浦・宮浦・都井・黒井など）、入江の奥や小平地の端に小さな砂丘を伴っていることがある（大納・恋ヶ浦・毛久保・都井など）。

大小の河川の河口部以外の海岸では、山地が海に迫り、波の侵食によって作られた高い海食崖が長く連続していることが多く、見事な景観が作られている。海食崖の下には礫浜や海食台が狭い幅で続き、高い崖を登り降りしないと通れない箇所があるにはあるが、普通には通行が可能である。海食洞はまれで、立岩は煙突岩（チムニー）の形状を示している。

(注)

^{*1} 贅波一舳の突出（夫婦浦の湾入）、舳一下石波の湾入、下石波一七ツ岩の突出、七ツ岩一都井岬の湾入（大納・宮ノ浦の湾入）、都井岬の突出、都井岬一合六ノ鼻の湾入（都井・黒井の湾入）、合六ノ鼻・荒崎から西方にかけての突出。（ ）内は大きな出入りの中にも含まれる小さな湾入を表す。

^{*2} 海図の等深線によれば、水島は大島（飴肥図幅）の南方延長である。

1. 山 地（一部に丘陵地を含む）

本地域では、ほとんどの山地が日南層群から構成されていて、宮崎層群は北東部の黒島から築島にかけての海岸に沿って、日南層群からなる山地に付着した形で僅かに分布しているだけであるので、全体としては日南山地に属していると見なしてよい。

本地域の山地のうち、高畑山を中心として、その東および南西にかけての山地は、周囲の山地に比べて高く盛り上がっているので、これを高畑山地（I b）とし、その他の山地を南郷一串間山地（I a）と呼んでおく。南郷一串間山地は飢肥図幅の飢肥一細田一南郷山地の連続であり、高畑山地は、高度はいくらか低いものの、酒谷山地に対応する性格を持つものである。

(1) 南郷一串間山地（I a）

この山地の最高点は図幅の北東部にある三角点369.6mであるが、300mを超すところは少なく、大部分が300m以下であり、全体として高度が低く、起伏の小さい山地である。この山地を、高度・起伏・斜面の傾斜・稜線の配列方向・山稜の形態などの違いから、贅波一古都山地・鹿鳴山一山神山地・本城山地・蜜柑山山地・都井山地に5区分して説明する。

贅波一古都山地（I a₁）は、本地域の北東隅を占めて、南郷の口ケ野、市木の郡司部・平田・古都・藤を結ぶ線で囲まれた山地である。先に述べた三角点のまわりだけ300mを超すところがあるほかは、全体としての高度は低く、起伏も小さく、傾斜も緩い。

ここでは数列の山稜が、その間に谷を挟んで北東から南西に平行して走り、規則的な配列を示している。これは、それぞれある厚さを持って重なり合う砂岩層と頁岩層（頁岩の代わりに砂岩と頁岩の細互層のこともある）^{*3}が、北東一南西の方向を軸とした褶曲により繰り返して現れていて、砂岩層が山稜を作り、頁岩層が谷を作っているためである。地層の傾きが緩い所ではケスタ地形^{*4}が作られ（例えば夫婦浦と舢の間や口ケ野東方の山稜）、地層の傾きが急であるが、あるいは地層が褶曲している所では褶

曲の軸部に、ホグバック地形*¹が作れている（例えば三角点369.6mが乗る山稜）。

これらのケスタの緩やかな斜面（ケスタの背面）には、かなり多数の大きな緩斜面があり、それらが合体して、全体として広い山腹緩斜面を作っている。また急な斜面（ケスタの崖面）では、小さな緩斜面が点々と並び、全体として長く狭い山腹緩斜面となっている。これら山腹の緩斜面は古くから農耕地や果樹園として開発されてきており、近年は人工的にかなり大規模な改変が進められているようである。しかし反面、これらは地すべりに伴うものであって、ケスタの背面では地層の面に沿った地すべり（層面すべり）が、また崖面側では崖錐層の崩壊が起っている場所であるので、手を加える場合はこのことに十分注意する必要がある。

ケスタやホグバックの稜線上には狭く短い平坦面が作られ、点々と続いていることが多い。先に述べた褶曲の軸部にできたホグバックである三角点369.6mの稜線上では、平坦面がいくらか幅広くなり、ここでは褶曲軸の延長方向にあたる山腹上に、ケスタの背面と同じような大きな緩斜面が生じている（子持田の北東の斜面上）。

黒島から築島にかけての海岸に沿った数箇所、東に緩く傾く宮崎層群の基底層が日南層群の上に乗って、ケスタ地形を作っている。特に築島では教科書通りの見事なケスタ地形が見られる。またいくらか陸寄りの尾根上に、宮崎層群の基底層が乗っていて、ごく緩く傾いたメサ地形*¹を作っていることもある（例えば夫婦浦の南方）。先に述べたこの付近の鋸歯状の海岸線は、日南層群と宮崎層群の境界部が海の侵食を受けてできたものである。

鹿鳴山-山神山地（I a₂）は、贅波-古都山地の西南にあり、南郷の口ケ野、市木の郡司部・平田・中福良・石原、本城の山神・樋口・上中園・遍保ケ野、鹿鳴山西麓（秋山峠）の峠道を結ぶ線で囲まれた山地である。山地の最高点は鹿鳴山の三角点で362.4mであるが、石原の西や山神

の北西で300mを超え、また200m以上の稜線が連続しており、贅波一古都山地に比べて高度も高く、傾斜や起伏も大きい。

稜線には北西一南東の方向性が目立っているが、東北東一西南西の方向性が加わり、山稜が直線的に長くは続かず切れ切れとなり、その平面形はジグザグである。稜線上の平坦面は多くはなく、切れ切れで連続しないが、鹿鳴山から南々東に伸びる尾根上(310m)は横川南方の稜線上(260m)の平坦面のように、いくらか幅が広く、大きいものも見られる。稜線の両側の斜面の傾斜は等しく、山の形は対称的で、山腹の緩斜面の分布もまばらである。

本城山地(I a₃)は鹿鳴山一山神山地の西にあり、秋山峠・上中園・本城川下流を結ぶ線の西側を、北東一南西に伸びている山地である。最高点は三角点256.9mであるが、200mを超えところは少なく、ほとんどが200m以下で低く、起伏も傾斜も小さい丘陵状の山地である。全体としての方向性はあるものの、はっきりしたケスタ・ホグバックなどの形態は見られない。

稜線の上や山峰の頂には、いくらか広く長い平坦面がかなり多く見られ、それらが少しずつ段状に高度を低めながら、稜線上で連続している所

(注)

*³ 頁岩層と、砂岩と頁岩の細かい互層(細互層)とは、地形的に同じ役割をしているので、以下特別の場合を除き、両方を含めて頁岩層と表現しておく。

*⁴ メサ・ケスタ・ホグバック

侵食に抵抗する硬い岩層(例えば砂岩層)と侵食されやすい軟らかい岩層(例えば頁岩層または砂岩と頁岩の細かい互層)が重なっているとき、地層が水平であると、テーブル状の台地ができ、上位にある硬岩層は下位にある軟岩層を保護し、台地の縁で切り立った崖を作る。これをメサという。地層が緩く傾いていると、硬岩層は山を作るが、その一方の斜面は地層の面に平行で緩く傾き、他方の斜面は地層の面に直角に切り立って、非対称な形の山ができる。これをケスタという。地層の傾きが急になると(褶曲しているときは、褶曲の軸部にある硬岩層が山を作る)。硬岩面からなる山の両側の斜面の傾斜は等しくなり、山の形は対称的になる。これをホグバックという。メサでもケスタでもホグバックでも、硬岩層でできた切り立った斜面の下にある軟岩層の部分は、崖錐状の斜面を作っていて、地すべりを起こしやすい。またケスタの緩斜面側では地層の面に沿った地すべりが起きやすい。

もある。さらにこの山地の南部、上代田から本城川河口にかけては、等高線に沿って幅広く分布する平坦面が途切れなく連続し、北東から南西に緩く傾いている。ここでは日南層郡の上に第四紀の礫層（これを港層と呼んでおく）が乗っていて、その表面が平坦面を作っている。

この平坦面は、宮崎平野を作っている段丘面のうち最高位の面（久木野面）に相当するもので、これを港面と呼んでおく。港面の高度は、港で10m、上代田で75mであり、面の傾きは約 1.3° （約23%）である。上代田では、港面より少し高い稜線上に平坦面があつて、前に述べた稜線上の連続した平坦面の一部となり、北々東に高まりながら秋山峠まで続いている。

図幅北西隅の秋山・北方から本城川河口付近にかけて、本城山地の高度は低くなり（100m未満）、丘陵地としての性格を強く持つようになる。この部分を、北方一本城丘陵地（I a₃）として区別しておく。

蜜柑山山地（I a₄）は本城山地の南側にあつて、本城川下流・下中園・樋口・都井隧道（都井峠）・黒井を結ぶ線で囲まれた山地で、最高点（280m）は都井峠の南々東約1kmの稜線上にある。この山地では200m以上の部分がかかなり広く、しかも連続して分布しており、稜線の高度がおおよそ一定していることをうかがわせる。その様子は串間市街地や都井岬から遠望することができる。

この山地では、都井峠を中心として多くの尾根が枝分かれをし、枝分かれした尾根の方向は、峠付近では北々東—南々西から北東—南西、蜜柑山付近では東西、本城川に沿っては西北西—東南東と、少しずつ変化しており、都井峠に向かって渦を巻いているように見える。これらの尾根は砂岩層から作られ、谷は頁岩層からなっていて、明らかなケスタ・ホグバック地形の性質を示している。ただし、贅波—古都山地と比べると、これらの砂岩層や頁岩層のそれぞれは、層厚が薄く、数も多い。またこれらの地層は、本城川河口に向かって南西にふくらむ弧を描きながら、向きを北東方向に変えて、本城山地を作る地層に続いて行く。それらが、この山地の尾

根の枝分かれと、渦巻き状の配列とに反映されている。

都井峠を中心に枝分かれしている尾根の上には平坦面が見られるが、特に東寄りの幾つかの尾根上では、幅広い平坦面が連続している。これら尾根上の平坦面の傾きは、西南西に約 3.1° （約54%）である。

山腹緩斜面は一般には小さく、山地内に散在しているが、最も東側の尾根の先端と荒崎の尾根の先端付近には、ケスタの背面上に作られたかなり大きな緩斜面がある。また前者では、合六鼻の上にあるケスタ崖面側の崖錐部に、多くの緩斜面が見られ、その中にはかなり大きなものが含まれている。

都井山地（I a₃）は黒井・都井峠・恋ヶ浦を結ぶ線の南側にある山地で、最高点は都井岬の三角点295.3m（扇山）である。都井岬には高度200mを超える所がかなり広く分布しているが、そのほかではほとんど見られず、起伏や傾斜も、都井岬では幾らか大きく、そのほかでは小さい。

この山地を作るそれぞれの山稜は、都井岬の伸びに平行しており、稜線の東斜面が急で、西斜面が緩いため、西に傾いたケスタのように見えるが、地質構造との関係ははっきりしない。また、都井岬の三角点に乗る扇山（稜線は東－西性で北側が急）とその北西にある山峰（小松ヶ丘、北々西－南々東性で東側が急）とは、方向が直交してはいるが、共にケスタの性質を持つように見え、その背面上に山腹緩斜面が作られている。

山頂や稜線上の平坦面として、都井岬では扇山（295m）、小松ヶ丘（285m）、都井岬灯台の西（220m）などにあり、そのほかでは、高度200m前後の平坦面を持つ尾根や山峰が、黒井－宮原－恋ヶ浦を結ぶ線の北側で数多く見られ、特に都井峠から南に伸びる尾根では、立宇津まで連続している。

上記のようにこの山地の山稜をケスタとすると、山腹緩斜面は、崖面側（東斜面）にも見られるが、より背面側（西斜面）に多い傾向がある（例えば、黒井の北、宮原の北および南東、都井岬の上記の山峰など）。

(2) 高畑山地 (I b)

下石波・石原・山神・都井峠・恋ヶ浦を結ぶ線で囲まれた山地で、高畑山で500mを超え、南郷一串間山地に比べて高く、傾斜も、起伏も大きい山地である。主な稜線は西北西-東南東および北々東-南々西の方向性を示し、複雑に折れ曲がっているが、400m以上の高度をもって、高畑山から東南東および南西に伸び、大きく見ると北西へ直角に突き出した形の山塊を作っている。

高畑山から東南東へ伸びる稜線の、北側では急な斜面の裾に緩い斜面があり、南側の斜面では傾斜は緩い。また山稜部は砂岩層で、谷間は頁岩層で作られているので、おおまかには、地層が南に傾いて崖面を北に向けたケスタと言えるかも知れない。

主な稜線上の山峰や尾根には、狭い平坦面が点々と見られる。高畑山から東では、前記した最高点534mの面から、490mの平頂峰、473mの尾根、三角点425.4mの尾根と、途切れ途切れに段差を付けながら高度を下げていく。また、南西に伸びる尾根上では明らかな平坦面は少ないが、緩やかに起伏した稜線が、ある幅を持って470mから370mまで高度を下げながら途切れなく連続し、都井山地の平坦な稜線（高度約200m）まで急降下している。緩起伏面のこの方向への傾きは約 1.8° （32%）である。

比較的広い山腹緩斜面は、この山地をケスタとすれば、背面と見られる斜面に多い（例えば名谷から滝山越にかけての山腹、高畑山自衛隊分屯基地の南側、その他）。ケスタの崖面側のものとしては、山地の北側斜面の裾を作る崖錐斜面に、多数の広い緩斜面が分布し、全体として大きな山腹緩斜面を形成している。これらは地すべり性の緩斜面である。

2. 平地 (台地および低地)

この地域の主な河川である市木川・本城川・福島川と、それらの支流に沿って平地が見られ、それぞれ市木平地 (II a)・本城平地 (II b)・串間平地

(Ⅱc)と呼んでおく。

また山地を刻む小河川に沿って、北縁には飢肥図幅から続く、湯上(Ⅱd 口ケ野)・江川(Ⅱe 贅波)の両平地があり、日向灘および志布志湾に注ぐものとして、夫婦浦(Ⅱf)・名谷(Ⅱg)・大納(Ⅱh)・大納の南(Ⅱi 中河内)・恋ヶ浦(Ⅱj)・宮ノ浦(Ⅱk)・毛久保(Ⅱl)・都井(Ⅱm 東川)・黒井(Ⅱn)・永田(Ⅱo 永田は志布志図幅)など、多くの小平地が見られる。崎田(志布志図幅)の平地は本城平地に含めておく。これらの平地は、現在の海面や河川に規制されて作られた低地と、それより高い位置に作られた台地・段丘からできている。

例として市木川について述べる。海北・郡司部・石原付近から下流では、谷は開け、氾濫による細粒の堆積物によって、川の両岸に低平な氾濫原が作られている。上流部になると谷は狭くなり、粗粒の堆積物によって、いくらかの傾斜を示す低地が溪谷底を作り、山地の斜面を刻む小さな谷底に続いて行く。川岸には少し高い盛り上がりが見られることがあり(自然堤防、例えば八ヶ谷の北)、古い氾濫原が、少し高い平地として残っていることも多い(沖積段丘、例えば古都)。

また谷が山地から平地に入る所では、運搬物が広がって扇状地を作る。高畑山地の北東麓の下石波では、見事な天井川を伴った扇状地が形成されており、八ヶ谷・藤・中福良などで見られるように、山腹の斜面を刻む小さな溪谷底が低地に注ぐ所では、小さな扇状地となって、山麓の緩斜面を作っている。

以上は川の働きで作られた低地であるが、河口の近くでは以前に浸入していた海の堆積物(海成層)の上で氾濫原が作られており、低湿で、地下に泥炭層が埋まっていることが多い。この部分を海岸低地とする。

藤から石波にかけての海岸に沿って、陸地化した旧沿岸州(以前は海の中にあった)があり、藤では、その海側に海岸平地を隔てて新しい海岸砂丘があり、南方ではその一部が旧沿岸州の上に乗っている。この旧沿岸州は、氾

濫原上の沖積段丘に対応するもので、海岸低地より少し高く、京大霊長類研究所付近では小規模ながら分岐砂州の形態を示している。

郡司部の付近には、シラス層が堆積して作られた台地と、それが幾らか侵食されて少し低い面を持つ台地とが見られる。それぞれをシラス台地上位面・下位面とする。それより更に低い位置に2段の平坦面があり、それぞれを河岸段丘上位面・下位面とする。シラス台地や河岸段丘は、そのほかの市木川流域の各所に点在している。

氾濫原が若い時代（完新世）の河原を代表するものとすれば、シラス台地下位面や上・下の河岸段丘面は古い時代（更新世後期）の河原を代表するものである。シラス台地下位面や河岸段丘の面は、以前（更新世）の氾濫原の遺物と言える。

低地より高い段丘を上流に追跡して行くと、それがそのまま、上流域での溪谷底となっていることがあり、また低地を上流に追跡して行くと、急な段差を伴って溪谷底が高くなり、高くなった溪谷底が、下流では河岸段丘のどれかに対応していることもある。この場合は、上流部の溪谷底は古い時代に作られたものと言える。

上流部の溪谷底が河岸段丘に対応しているときは、地形分類図では、対応する段丘と同色で示してある。溪谷底・扇状地・段丘を作る堆積物の性質は同じで、土石流によって運ばれた、層厚5m前後の粗大な砂礫層であることが普通である。地形分類図での色が違い、地形的には意味が違っていても、表層地質的な堆積物の性質が違ってはいるわけではない。ただし河岸段丘には、シラス層を切ってできる場合と、日南層群を切ってできる場合とがあって、それぞれの地質的な意味は違っているが、地形分類図ではその区別はしていない。シラス台地に付随しておれば前者であり、その近くにシラス台地が無ければ後者であると、ひとまず判断して良い。

シラス台地は、図幅北西隅の秋山・北方にかなり広く分布しており、その西にある広大なシラス台地（大東台地）に続いている。また本城川に沿って

も、下代田・本城から遍保ケ野にかけて、かなり広く分布している。日向灘・志布志湾に面する小平地では分布を見ていない。

3. その他

(1) 地すべり地および崩壊地

この地域の地すべり地はケスタ地形に伴うことが多く、背面側では『層面すべり』が、崖面側では『崖錐斜面のすべり』が起きる。地すべり地の表面は波打ち、大小の緩斜面が数多く作られている。また地すべりには、斜面を作る岩質も関係しており、例えば贅波東方の地すべり地は、宮崎層群基底が作るケスタの崖下にできた崖錐斜面であるとともに、斜面を作っている日南層群の頁岩には『膨潤性』があり、水を吸うと膨張することにもよるものである。

地形図上に記されている崩壊地は黒井の西の小谷の頭だけであるが、地形分類図には航空写真から判読された少数の崩壊地を記入してある。しかし高畑山の北麓に扇状地が作られていること、扇状地の形成には崩壊による土石流が係わっていること、小谷の出口に小扇状地を伴うこと、上流域の渓谷底が土石流の運搬物からなること、例えば内之畑南方の谷や恋ヶ浦の谷で見られるように、渓谷底には新旧の土石流堆積物が普遍的に見られることなどから、崩壊はいつでも、どこでも起こってきたことが結論されよう。

地すべり地にみられるものは別として、山腹緩斜面のあるものは、古い時代の斜面崩壊や、地すべりの跡であることもあろう。その場合は緩斜面末端の高度は、山峰や尾根上の平坦面と同じく、当時の侵食基準面の位置を示している筈である。

(2) 遷急点

地形図や航空写真から判読された遷急点を、地形分類図に記入してある。これらの遷急点はある範囲内で、およそ一定の高度を示すことがあ

る。例えば高畑山から南西への尾根で380-420m (410-440m)^{*5}、都井峠から立字津へ伸びる尾根で160m (220m)、合六鼻の北方約1.2kmの尾根で200m (215m) など。これらのことから遷急点の位置は、侵食基準面の変化を反映しているように見える。また、谷が砂岩層を横切るところに遷急点があることもある。ケスタ・ Hogバックを作る多くの尾根が並んでいる蜜柑山山地にその例が多い。

(3) 人工改変地

航空写真の判読によれば、平地だけでなく山地も開発が進められているようである。特に、山地内の低いところや平坦面・緩斜面が分布する所で著しい。そこでは、地表面におよそ従って段々に切り開く工事が、かなり大規模になされているように見える。しかし水田も畑も造林地も、元来は地形をかなり改変しているものであるので、どこで線を引けば良いかの明らかな区別が付けづらいため、分類図への記入は大部分省略した。

(遠藤 尚・兵藤健二)

(注)

^{*5} () の中は、その地点での尾根上の平坦面の高度である。

Ⅱ 表層地質

1. 概 要

本図幅中に分布する地層は、古第三系（一部中新統下部を含む）日南層群、新第三系宮崎層群、第四系の段丘堆積物・入戸火砕流堆積物・沖積層・海岸砂丘砂などである。

2. 日南層群（古第三系～中新統下部）

全域で基盤岩として分布しており、本図幅域の地層として、最も広い分布を有する。海岸部や川沿いの低地では第四系に被覆されているものの、その下位に伏在している。日南層群よりは、隣接地域も含めて、始新世前期から中新世前期におよぶ様々な時代の、軟体動物、有孔虫、放散虫、ナンノプランクトンなどの化石が発見されている。化石の示す時代と見かけの地層の累重順序に整合性がないこと、未固結時の変形が認められること、地質構造がきわめて複雑で、地層の側方連続性が良くないことなどから、本層は、全体がオリストストローム（大規模な海底地滑り堆積物）、あるいは重力活動に伴うナップ群（低角の断層によりシート状の岩体が繰り返し累重したもの）と考えられている。露頭規模では、一部を除いて、層理が維持されている場合が多く、*brock in matrix*の構造をとるものは少ない。したがって、本層群がオリストストロームであるとしても、マトリックスの少ない、シート状岩体が集積したものと考えられる。本図の作成にあたっては、各層がそのようにある程度の連続性をもつものとして、地質構造を把握し表現してある。

本図幅地域内の日南層群は泥岩、砂岩、砂岩泥岩互層よりなり、ごく少量の塩基性火山岩類を伴う。これらの構成比や地質構造の特徴は、本図幅内でも地域ごとに大きく異なる。以下に市木から北側の北東部地域、横川から秋山にかけての北西部地域、本城南方の南西部地域、高畑山から都井岬にかけての南東部地域に分けて記述する。

(1) 北東部地域

市木付近から北側の北東部地域では、厚さ百～数百mの砂岩層・砂岩泥岩互層・泥岩層が、北東-南西の軸を有し、軸面が北西に傾斜した閉じた褶曲をなして分布する。郡司部から北東へのびる背斜と、その南東側の向斜の1背斜-1向斜構造をなす。褶曲軸はほぼ水平で、地層はほぼすべて北西傾斜であり、したがって背斜と向斜の間の翼は逆転している。この褶曲構造は、さらに、市木付近をとおり、西にプランジした東西性の軸を有する背斜構造により曲げられており、上記の向斜軸は、子持田付近から南北に方向を変え、中福良と石原の間へ続く。石波付近では地層の走向は北西-南東となり、南西側へ傾斜している。

(2) 北西部地域

北西部の横川から秋山にかけての地域では、泥岩を主とし、砂岩層がまれに狭在する。砂岩層は連続性の乏しいものもあるが、走向方向に比較的よく追跡されるものもある。地層の走向は北北東-南南西で、西に高角で傾斜している。走向方向に南南西へ、上千代野方面へ追跡していくと、次第に砂岩層が厚くなり、次に述べる蜜柑山付近の砂岩が卓越した部分へと連続する。

(3) 南西部地域

南西部の蜜柑山から樋口にかけての地域では、砂岩層が比較的卓越するが、砂岩泥岩互層・泥岩層とともに、数十～数百m厚さで、整然と繰り返して重なっている。地質構造は、蜜柑山付近では東西走向で南に傾斜するが、その東側では、北東-南西走向で、逆転して北西傾斜となっている。さらに樋口から都井隧道にかけての地域では、南北走向で、ここでも逆転して西傾斜となっている。したがって、先述の北西部地域との間に、本城付近を通り南西へプランジした背斜が、また、上田代付近には軸面が南西に傾斜し、軸が高角で南へプランジした、転倒した背斜が認められるが、全体としては南へ高角でプランジした南北の軸を有する複背斜構造をな

す。

(4) 南東部地域

高畑山から都井岬にかけての地域では、200~300m程度の比較的厚い砂岩層と泥炭層が繰り返している。高畑山付近は砂岩層が特に厚いが、大納から都井、黒井にかけては砂岩が少なく、泥岩が卓越する。砂岩層は厚さに比して、側方への連続性が乏しい。都井岬の半島部や立宇津付近では、泥岩優勢の砂岩泥岩互層も認められる。

地質構造は、高畑山から都井にかけては、全体としては低角であり、波長が1~2kmの軸面の立った開いた褶曲が認められる。しかし、この褶曲の軸は、高畑山南東の海岸部では南東-北西、高畑山付近では東西、高畑山南西から都井にかけては南北の方向を示し、円弧を描くように大きく湾曲している。一方、都井岬の半島地域では、北東-南西の軸を有し、軸面が北西に低角で傾斜した横倒しの背斜が存在し、これにより半島の先端部から東側の海岸にかけては、広範囲で地層が逆転している。

3. 宮崎層群（新第三系、中新統上部~鮮新統下部）

本図幅域北東部の夫婦浦付近に、本層群基底部にあたる礫岩層・砂岩層が、日南層群を不整合に覆って、わずかに分布する。

4. 高位段丘堆積物（更新統）

上田代付近の標高60~70mほどの尾根上に、高位段丘礫層がわずかに分布している。露出が十分でないため、詳細は不明である。

5. 入戸火砕流堆積物（上部更新統）

一般にシラスと呼ばれているもので、主として軽石片とその破片である細粒の火山ガラスよりなる、淘汰の悪い珪長質の凝灰角礫岩である。これは、約2万2千年前の始良カルデラ（現在の鹿児島湾奥部）形成時の大規模な火

山噴火に由来する火砕流の堆積物であり、図幅北西部の奈留・秋山付近や、本城付近に広く分布しているほか、郡司部付近にもまとまった分布がある。厚さは最大で50mにおよび、上部は未固結であるが、下部は熔結しており灰石と呼ばれている。本図幅地域では、熔結部の露出は少ない。

6. 沖積層（完新統）

本城付近、市木付近、都井付近などの河川沿いの低地には、礫、砂、シルト、粘土などからなる沖積層が分布するが、多くは耕作地や居住地になっている。

7. 海岸砂丘砂（完新統）

市木や都井付近の海岸線に沿って、砂よりなる砂丘ないし浜堤が形成されている。これらは海拔数mの小丘をなす。

8. 応用地質

(1) 冷泉

下石波で湧出する冷泉が、タギリ温泉として、浴用に供されている。

参考文献

- 加藤高政（1985）：日南層群の層位学的研究。東北大地質古生物研邦報，No.87, 1-23.
- 木野義人（1959）：5万分の1地質図幅説明書「都井岬」・地質調査所，18p.
- 宮崎県（1982）：20万分の1宮崎県地質図および同説明書（宮崎県の地質と資源）．宮崎県，79p.
- 酒井治孝（1988）：岬オリストストローム帯の成因と高千穂変動の再検討。地質学雑誌，94, 945-961.
- 坂井 卓・艸場 敬・西 弘嗣・小守道郎・渡辺正幸（1987）：宮崎県日南地

域の四万十帯オリストストローム—特にオリストリスの変形構造と配置の機構について—。九大理研報, 15, 167-199.

首藤次男 (1952) : 宮崎層群の地史学的研究。九大理研報, 4, 1-40.

首藤次男 (1963) : 日南層群の地史学的研究—特に高千穂変動について—。九大理研報, 6, 135-166.

地質総括表

地質時代				岩層	
新 生 代	第 四 紀		完 新 世	海岸砂丘砂	沖積層
			更 新 世	入戸火砕流堆積物	
				高位段丘堆積物	
	第 三 紀	新 第 三 紀	鮮 新 世	宮崎層群	
			中 新 世		
		古 第 三 紀	漸 新 世	日南層群	
			始 新 世		

Ⅲ 土 壤

本図幅は県の南部に位置し、高畑山（518m）を頂点とし200m～500mの標高をもつ山々が連なっている。図幅の東半分は日向灘となっており陸地は西半分に広がっている。図南部には都井岬が突き出ており中央部には市木川、西部には本城川が流れており川沿いに水田が広がっている。東には日向灘、南には志布志湾が山地にせまり、海岸侵食を受け奇形波食の景観を呈する海岸線が連なっている。

図幅南部の都井岬から中央部の高畑山を経て北部の鹿鳴山に連なる稜線を境として市木川と本城川・福島川に分かれ、この間に数条の河谷があり狭い溪谷地を形成している。

本図幅の山地地域は第三紀に属する日南層群の砂岩、頁岩を主材料とした褐色森林土壌、乾性褐色森林土壌が広く分布し、海岸地域では黄褐色系の褐色森林土壌、乾性褐色森林土壌が分布する。また、やや傾斜の緩やかな地帯には火山噴出物に由来する黒ボク土壌、淡色黒ボク土が分布し、海岸に接する地域は残積性未熟土が分布し、海岸の一部には砂丘未熟土も分布している。

本図幅中の農耕地土壌は海岸近くに砂丘未熟土壌、残積性未熟土壌が分布しているが耕作されているところは少ない。海岸線から離れた山地では第三紀に属する日南層群の砂岩、頁岩を主体にした褐色森林土壌及び残積性未熟土壌が畑地、樹園地として存在し、水田では河川沖積物を母材とした灰色低地土壌、グライ土壌が存在する。また、水田、畑地とも火山噴出物に由来する腐植質黒ボク土壌が傾斜の緩やかな地帯に残っている。

1. 未熟土

本図幅内に出現する未熟土は砂丘未熟土壌と残積性未熟土壌であり海岸部に分布する。

1.1 砂丘未熟土壤〔RS〕

本土壤は海浜砂丘にみられる粗粒質土壤で表土、下層土ともに砂土で占められ、排水の良い土壤である。粗粒質のため透水性が大きく、水分の保持力や保肥力が小さいため肥沃度は低く、生産力は極めて低い脊薄地である。海岸林の植生としてはクロマツ、ヤブニッケイ、シャリンバイ等が見られ、防潮林となっている。一部農耕地となり畑として利用されている。

1.2 残積性未熟土壤〔RG〕

本土壤は著しい表面侵食の結果、表層の腐植層が非常に薄いか、または、直ちに風化母材層や基岩に移行するものである。基岩は第三紀に属する日南層群の砂岩か頁岩が主になっており、海風の影響を直接受けやすい海岸の突出した凸形斜面及び稜線に見られる。一般に土壤は乾燥しており、構造の発達が微弱であり、腐植層が発達不良である。カシ、シイ類、ハマヒサカキ等の灌木が主な植生であり、土壤の生産力が極めて低いため、施業地としての可能性は乏しい。

2. 黒ボク土

本図幅内の山地や丘陵地は大部分が傾斜地である。これらの傾斜地は土壤侵食が大きく表土の流亡がみられる。したがって、軽い黒ボク土はこれら傾斜地には殆ど見られないが河岸段丘面の平坦地や緩やかな斜面あるいは山麓地等に分布している。黒ボク土は霧島火山帯の噴出物に由来するものと考えられるが、この黒ボク土には火山礫層の介在は認められず、また、その礫の存在もなかった。この黒ボク土の表層は腐植質の黒ボク土で、下層には腐植に乏しい明燈色のアカアヤ層（通称）が介在することで、妻図幅、高鍋図幅の土壤と同様のものと思われる。本図幅でもこのアカアヤ層の介在を特徴的な鍵層として、表土の厚さ、腐植の含量、斑鉄の有無などを基準にして次の土壤統群に区分した。

2.1 厚層黒ボク土壤〔AT〕

本土壤は黒ボク土のなかで腐植含量の多い表層土が50cm以上の厚さを有するものである。この表層土の色相は明度、彩度ともに低く黒色を呈している。この土壤は台地や丘陵地などの平坦でしかも周辺よりやや低地のところに分布している。表土の厚さは20cm内外で腐植に富む黒色の砂壤土である。次層の厚さは40cm内外で腐植に頗る富む黒色の砂壤土である。下層土は腐植含量の少ない黄褐色の砂壤土である。通称アカホヤと呼んでいる。本土壤統群ではこのアカホヤが50cm以下に介在し、またその厚さは40cm内外のものである。黒ボク土はその母材が火山抛出物に由来し、しかもアロフェン質であることから土壤の理化学性は不良である。特に磷酸吸収係数が大きく、有効態磷酸含量は少ない。又温暖多雨の気象条件のもと、土壤養分の流亡が大きいと交換性の塩基類の含量も少ない。しかし近年は石灰類や磷酸資財などによる土壤改良も行われ、また一般肥料としても多量施用の傾向にあることから表土においては有効態磷酸や交換性塩基類も富化されており、肥沃度は高くなっているところが多い。一方、下層土においてはその改良も不十分であることから養分含量は少ない。この土壤の分布地域では一般畑作物の生産性は比較的高い。

2.2 黒ボク土壤〔A〕

黒ボク土の中で表層（腐植含量の多い）の厚さが25cm以上50cm未満のもので、黒ボク土の次層に見られる多腐植層（黒ニガ層）が薄いか、表層に混層されているところが多い。下層に介在しているアカホヤ層は30cm内外から出現し、アカホヤ層の下にはち密な埴壤土の層が出現する。表土と次層の理化学的な性質は前述の厚層黒ボク土壤とほぼ同じである。下層土は壤質で腐植含量は少なく陽イオン交換容量の小さい磷酸吸収係数の大きなアカホヤ層が介在する。また、下層土は表層土に類似するが、土性が比較的粘質で透水性が中程度の土壤である。また、分布地域は河段丘面や丘陵地の平坦地、或は緩斜面等である。本土壤も養分含量は少なく、肥沃度も

低いところが多いが、近年土壤改良も進み、また、一般肥料も多施用の傾向にあることから、塩基類や磷酸等の土壤養分は富化され、肥沃度は高くなっており、一般作物の生産性も向上してきている。下層土においては養分の含量も少なく、またアカホヤ層が浅くから出現するところでは、作物根の伸長が阻害されるなどの障害がある。この黒ボク土壤における作物の生産性は中程度である。林地の自然植生はタブノキ、ヤブニッケイ、シロダモが多く、林床にはマンリョウ、フユイチゴ、ツワブキ等が見られ、大半がスギ、ヒノキの造林地となっている。

2.3 淡色黒ボク土壤〔A E〕

淡色黒ボク土壤は黒ボク土壤の分布域で比較的急斜面な稜線部等や乾燥の影響をうける緩凸面に分布し、黒色がやや弱い土壤で母材、層序の状態は黒ボク土壤とほぼ同じである。黒ボク土壤のなかで、腐植含量が10%以下と少ないものか、あるいは表層腐植層の厚さが25cm以下と薄いもので、しかも、下層土も火山抛出物の含有割合が高い母材に由来する土壤である。本図幅では丘陵地に分布するが、その面積は少ない。この土壤は比較的腐植含量が少ないもので、黒ボク土壤の区分で健層としているアカホヤ層が表土と混層されているものとみなされる。表土、下層土とも塩基類や磷酸などの土壤養分含量は少ないところが多い。したがって、肥沃度は低く一般に作物の生産性は低いところが多い。林地の自然植生は黒ボク土壤と同様であり、スギの造林地となっている。

3. 褐色森林土

本図幅内の山地や丘陵地の大部分を占める一般的な土壤である。基本的には基岩風化物を母材とする。下層は7.5Y R～10Y Rの色相を有することが多い。長期にわたる森林植生下で絶えず有機物の供給を受け、腐植を含んだ表層が形成されている。本土壤は山地や丘陵地に分布することから、気象条件、位置、地形、基岩の種類、植生、森林の管理等によって土層の層序、状

態や性状などが異なっている。

3.1 乾性褐色森林土壌〔B-d〕

気象的、地形的に乾燥の影響を受け易い山地の稜線部及びその周辺部に多く現れる土壌である。本図幅では海風の影響を直接受けないが、山の稜線部であるため常に乾いた条件におかれている。従来、森林土壌の適地判定で区分されてきたBA、BB、BC型の土壌がこれに対応している。表土も浅く、土壌が堅密で、腐植含量も少ないことから土壌生産力は低い。従って、積極的な森林施業は行われず天然施業地になっているものが多い。一部はスギ、ヒノキの造林地になっている。

3.2 乾性褐色森林土壌（黄褐色系）〔B（Y）d〕

本土壌は、乾性褐色森林土より海洋性の常風を受けやすい地域に存在し、日南層群の砂岩、頁岩を母材料とした丘陵地形の稜線部に分布する。本図幅の海岸近くに出現し、表土も浅く、土壌が堅密で、腐植含量も少ないことから土壌生産力は低い。従って、積極的な森林施業は行われず天然施業地になっているものが多い。部分的にスギ、ヒノキの造林地になっている。畑地では土層が浅く、乾燥し易く、また、塩基類の土壌養分も少なく肥沃度が低く、作物の生産性は低い。

3.3 褐色森林土壌〔B〕

本土壌は、林地内における代表的な土壌であり、山腹の下部、特に山麓や低山地域、傾斜の緩やかな丘陵地及び沢筋に出現する。一般に有機物の堆積が多く、表層土は腐植に富み、通気性、透水性が良好で、樹木の根系も発達している。森林としての生産性が高く、スギ、ヒノキの造林適地として林業的な利用価値の高い土壌である。本図幅では、海洋からの風の影響を受けない内陸部で、谷筋の奥まった場所や北東斜面、北斜面の傾斜の緩やかな地形の所に分布している。

3.4 褐色森林土壌（黄褐色系）〔B（Y）〕

本土壌は、海洋性の常風を受けやすい地域に存在し、気象的、地形的に

も表土層への有機物の供給が少ない。乾性褐色森林土が出現する区域内の中腹以下の斜面及び沢筋に出現することが多い。出現場所は主として丘陵緩斜面や段丘周辺部の斜面部であり、土壌の母材は第三紀日南層群の砂岩、頁岩から形成されている。一般に保肥力は中程度であるが、塩基類などの土壌養分含量は少なく、肥沃度は低い。従って生産性は中程度以下の所が多く、通常の褐色森林土より1ランク劣っている。植生は、褐色森林土壌に準ずるが、スギ等の人工林が多い。

4. 灰色低地土

河川流域や沿海平野部並びに丘陵地の谷間などに分布する。非固結堆積岩を母材とした土壌で、殆ど水田として利用されている。土性や礫層の有無などを区分基準として次の土壌統に分類した。

4.1 細粒灰色低地土壌〔GL-f〕

灰色低地土の中で作土下の土性が細粒質のものである。河川流域や沿海平野部、並びに丘陵地の谷間などに分布する。層序の発達は比較的明瞭である。表層土は腐植を含み灰色～灰褐色を呈する。土性は壤土から埴土のものまでみられる。糸根状などの斑紋を含み、礫は少ない。保肥力は中庸程度で、交換性塩基類など土壌養分含量は比較的多い。下層土は腐植に乏しい灰色～灰褐色を呈する埴壤土から埴土で、膜状や糸根状などの斑紋に富む、礫は少ない。保肥力は中庸程度で交換性塩基類などの土壌養分は比較的多い。地下水水位は低く排水は比較的良好である。この細粒灰色低地土は水田として利用されている。土壌中の養分含量も多く、肥沃度も高く作物の生産性も比較的高い。

4.2 灰色低地土壌〔GL〕

この土壌は図幅中の各河川流域や丘陵地の谷間などに分布する。層序や色相、斑紋などは細粒灰色低地土壌に類似しているが、作土下の土性が砂壤土～壤土のものまでである。表層土は腐植を含み灰色～灰褐色を呈する。

土性は壤土から砂壤土のものまでみられる。礫は少ない。保肥力は中庸程度以下で交換性塩基類など土壤養分含量は中程度。下層土は腐植に乏しい灰色～灰褐色を呈する壤土～砂壤土で、礫は少ない。保肥力はやや小さく、交換性塩基類などの土壤養分含量は中程度のものが多い。地下水位は低く排水は比較的良好である。この土壤は水田として利用されている。土壤中の養分含量は中程度で、肥沃度も中庸のものが多く、したがって作物の生産性も中程度である。

5. グライ土

低地の河川流域や海岸入江に接する地域などに分布する。非固結堆積岩を母材とする土壤である。低地で地下水位が高いため、常に湿潤状態の土壤のところで50cm以内にグライ層を有する。この土壤でも土性を分類基準に次の土壤統群とした。

5.1 細粒グライ土壤〔G-f〕

本土壤は地表下50cm以内にグライ層を有し、下層土の色相は青灰色か灰色を呈する。土性が細粒質のものである。河川流域の低地か迫田に分布し層序の発達は弱い。常に周辺からの湧水や滞水で地下水位は高く排水は悪い。表土は腐植を含む程度で灰色～灰褐色を呈する埴土～壤土である。膜状、糸根状の斑紋を含む。礫は少ない。保肥力、交換性塩基や有効態珪酸などの含量は中庸である。水田として利用されているが、排水が悪く湿田である。土壤養分状態は中庸で作物の生育は中程度である。

5.2 グライ土壤〔G〕

福島川流域で周辺よりやや低地と迫田に分布する。層序や色相、斑紋などは細粒グライ土壤に類似するが、作土下の土性が壤土から砂壤土である。土壤の養分状態は保肥力がやや小さいため、細粒グライ土壤よりやや劣る。水田として利用されているが、排水が悪く湿田である。作物の生産性は中程度である。

(黒木 満義、岩下 徹)

IV 土地利用状況

1. 農 地

本図葉の農地は西部に市木川流域、西部に本城川流域、南部に都井の東川流域に分布している。

2. 林 地

本図葉には林地が広がり、多くは国有林である。

また、民有林の77%は人工林である。

表IV-1 地域の耕地面積

(単位：ha)

項目 市町村名	耕 地 面 積	田	畑			
			小 計	普通畑	樹園地	牧草地
串 間 市	3,500	1,830	1,670	1,280	360	33
南 郷 町	794	440	354	35	319	-
計	4,294	2,270	2,024	1,315	679	33

第39次宮崎農林水産統計年報

表IV-2 地域の林野面積

(単位：ha)

項目 市町村名	総森林 面 積	森 林 率 (%)	国有林	民 有 林						国 有 林 率 (%)
				計	針 葉 樹	広 葉 樹	竹 林	無立 木地	人 工 林	
串間市	22,502	76.3	8,852	13,650	10,549	2,790	124	187	10,660	39
南郷町	3,942	62.4	384	3,558	2,587	855	79	39	2,588	10
計	26,444	-	9,236	17,208	13,136	3,645	203	226	13,248	-

宮崎県林業統計 (平成3年)

1993年3月 印刷発行

南 那 珂 地 域
土 地 分 類 基 本 調 査

都 井 岬

編集発行 宮崎県農政水産部農業振興課
宮崎市橘通東2丁目10-1

印 刷 富士マイクロ株式会社
宮崎市船塚2丁目182-1
本村ビル1F

TEL 0985-27-4068